

第3章(5)「おどる聖と念仏札」

中世ってどんな時代？

— 一遍の救済活動を考える —

和井田 祐司

1 学び舎『ともに学ぶ人間の歴史』の活用試論

本稿では、『ともに学ぶ人間の歴史』の第3章「(4) 東国に幕府をつくる—鎌倉幕府—」「(5) おどる聖と念仏札—鎌倉時代の仏教—」「(6) 市に集まる人びと—鎌倉時代の商業—」(64～69 ページ)の記述・資料を用いた授業プランを提示する。このようにページを横断して教材を生徒に投げかけるのは、源平争乱とききなが重なった時代=平安時代末期～鎌倉時代の初期を、一遍という人物に焦点を当てながら描くためである。

本稿が志向するのは、「見開き1ページを活用してこのような授業をした」というコンパクトな展開事例ではなく、教科書を横断しながら使われている資料を切り貼りすることで、より自由な授業展開を模索することにある。図表1枚、記述1ヶ所をどのように活用したか、という点を重視したい。

なぜそのような形式の授業を提示するかといえば、子どもが本気になって追究しようとする教材が、学び舎『ともに学ぶ人間の歴史』に多くあると感じるからである。授業の山場を設定しやすい端的な記述や、どのページにも掲載されている大きな絵図などがある。教室の子どもの状況や、授業者がより深めたいテーマ性に各資料を合わせながら、再構成が可能である(その際は教科書の記述箇所や絵図をスキャナーで取り込む等して、授業プリントをつくると良い)。

2 教材研究の一例——中世という時代の大観と学習材としての『一遍聖絵』

『ともに学ぶ人間の歴史』68 ページに見られる、「備前福岡の市」は、子どもたちを引き付ける「ネタ」である。市の場面が描かれているので、例えば売られている商品や、その流通路に注目し、経済的な視点で学ぶのも面白い。当時の社会・経

済状況を含む、構造的な理解につながる教材である。しかし、多くの場合、この「備前福岡の市」の場面のみを扱いがちである。『一遍聖絵』(=『一遍上人絵伝』)は一遍の生涯が描かれた壮大な絵巻物であり、「備前福岡の市」の場面の前後をとって見ても、ドラマチックに展開する。一遍が布教活動で、吉備津宮の神主の息子の嫁を出家させ、それを知った神主の息子は従者とともに一遍を追いかける。一遍に追いついた緊迫した状況が、「備前福岡の市」の場面である。



『一遍聖絵』「備前福岡の市」 国立国会図書館蔵

一遍上人絵伝』(小松茂美編 『日本絵巻大成別巻』)の解説文を抜粋する。

町の辻で、一遍は、今日も熱心に念仏を勧めるのであった。市には、掘立ての長屋五棟がある。魚や鳥・米・布・履物・壺など、さまざまな品物を売っている。大まないたの上で鯉の料理をする男。筵を路上に広げて、杵で米を量る男。布の品定めをする被衣姿の女。あなた、これをぜひとも買ってください、と亭主にせがむ市女笠の女。髭面の男の手には、銭束がしっかりと握られている。

ところが、こうした平和な市の中に、降って湧いた事件が持ちあがった。馬

から下りると、ばらばらと吉備津宮の神主の子息主従は、一遍の前に立ちはだかった。会えば、恨みのひと言、怒りの罵倒も浴びせんものと、心はずませていたのに。

男が、腰の大太刀に手をかけたとたんに、一遍のほうが先に口を開いた。あ、そなたは、吉備津宮の神主どのおご息とな……。あとは、蛇にこらまれた蛙も同然。主従は、ただ、眼を白黒させるばかりであった。

その後、どうなったのか。

しばらく、沈黙の時が流れた。やがて、観念した夫は、上人さま、私が、私が悪うござった。妻同様、私も発心いたしました。どうか、私に戒をお授けください。剃髪して入道いたします。という、即座に、かぶりは折烏帽子を脱ぎ、腰の大小を大地の上に投げ出してしまった。

急場を聞いて、市から檜桶を借りて、水が運ばれた。懐中から剃刀を取り出すと、一遍は、夫の頭に剃刀を当て始めた。では、われわれも、と従者の二人も腹巻鎧を脱ぎ、太刀を腰から解くありさま――。

陸のできごとをなにも知らぬ風情の川舟が、静かに川を下っていく（後略）。

このように、場面の前後の展開も含めて、面白い。

なお、『一遍聖絵』に描かれる「備前福岡の市」について、五味文彦は「ここに福岡の市という市が描かれている点にも注意したい。それまでの布教の対象は、武士の館が中心であったが、それが市に来る人々に勧めるようになってきているからである…（中略）…宿や市などがこの時期に生まれ、にぎわっていったことを絵は物語っている」と指摘する（『新視点中世史 躍動する中世』より）。

それでは、市という空間にはどのような特色があるのか。網野善彦によれば、市は「神々の世界、あるいは冥界との境であり、共同体を越えた境界領域」であり、「無縁」の場であった（『無縁・公界・楽』参照）。無縁の場ゆえに、市はアジュール（聖域）としての機能も担っていた。網野の著書、『無縁・公界・楽』には、以下の記述がある。

市では、殺傷はもちろん、喧嘩口論、押買押売、さらに借金取り立ても固く禁じられていた。借金や罪を負った人も、奴隷身分の人も、市の場では追及を免れることができた。そして万一、何か事件が起こった場合でも、それはその場のみで処理され、市の外には持ち出さない習慣であった。（『無縁・公界・楽』より）

一遍が念仏という救済活動を展開し、そこに人々が集まった背景には、社会の荒廃状況がある。10年間続いた源平の内乱、地球の寒冷化とききんの頻発（この点については、『ともに学ぶ人間の歴史』71 ページ「気候の変動と大ききん」に記されている）という時代状況のなかで、救いを求める人々の心性があった。この点と関連付けながら、一遍を学んでいくのは、中世という時代のイメージをつかむきっかけになる。そういった観点に立った際に、備前福岡の市・念仏札・布教の様子（踊り念仏）・その前提としての飢餓（『餓鬼草紙』）等この題材に関するネタが『ともに学ぶ人間の歴史』に多数収録されているのである。

3 授業の展開

この授業は、源平合戦の時代のあとに行う。「鎌倉時代」を学ぶ際に、内乱との連続性のなかで授業を組みたい。そこで、鎌倉時代の成立と一遍の生涯を結びつけながら、授業を展開する。

冒頭「念仏札」を使用する。この「念仏札」もまた、『ともに学ぶ人間の歴史』からコピーしたものである。これを厚紙に印刷して準備しておく。教室に入って、授業を開始する段階から、授業の様子を再現しよう。

〔導入〕「念仏札」との出会い

T：「突然ですが、みなさんに質問があります」

【問】あなたは、「死後の世界」を信じますか？

T：「死後の世界を信じる人、手を挙げてみてください。それでは、信じないという人も手を挙げてみてください。」

S：「信じない。死んだら、何もなくなると思う」

S:「信じる。人は死んで、生まれ変わるって聞いたことがある。前世の記憶もっている人の話も聞いたことがある」

死後の世界を信じないという生徒もいれば、信じているという生徒もいる。少し意見交流したうえで、教室をまわり、人数分以上印刷した「念仏札」を一人一人に渡していく。

T:「これを受け取れば、極楽浄土へ行けるお札を持ってきました。
極楽浄土とは、仏教世界でいう、とても美しくて安らかな、死後の世界です。あみだ様が救ってくれます。ほしいですか？」

S:「ほしい！もう1枚ちょうだい！」

T:「はい、どうぞ。これをもっていけば極楽へ行けるからね」

S:「いらない」

T:「そういわずに、まあもっておきなさい。筆箱にでも入れておくといい」

いらないという生徒にも、無理やり？渡していく。怪訝そうに見える生徒もいるが、教室は大盛り上がりである。

T:「今配ったカードには、どのように書いてありますか？」

S:「南無阿弥陀仏（なむあみだぶつ）？」

T:「そう、南無阿弥陀仏。これがあれば、あみだ様が救ってくれます。念仏札というものです。実は、今から約730年前ごろ、いま僕がやったのと同じようなことをした人がいます」
と言い、具体的な学習活動に入っていく。

〔展開1〕時代状況と救いへの渴望

T:「前回、源氏と平氏の、内乱の時代について学びました。そのあとに「鎌倉時代」と呼ばれる時代に入っていきます。当時活躍した人物が、「念仏札」を渡した一遍です。資料を読んでみましょう」

◀資料1▶ 5年におよんだ源平の内乱では、多くの命が失われました。同じ一族が、敵味方に分かれて戦い、負けた側では、幼い子どもまでが殺されること



もありました。内乱の時期のききんでは、多くの人たちが餓死しました。
『ともに学ぶ人間の歴史』66 ページ

T: 「当時の、京都のききんを描いたといわれる絵です。『餓鬼草紙』といいます。
気づいたことや、変だなあとと思うところはありますか？」



『餓鬼草紙』(写)「何便餓鬼」 国立国会図書館蔵

S: 「ガリガリだけどおなかだけ出ている人がいる」

S: 「栄養失調の人じゃないかな? そういう写真を見たことがある」

S: 「裸の人がいる」

S: 「排便を狙っている?」

T: 「当時、飢えてこのような体型になった人たちもいたのでしょう。この絵自体は、前世の行いが悪くて「餓鬼」になった人たち、と描いていますが、モデルとなった栄養失調の人たちがたくさんいたと考えるのが自然です。ききんの際の、京都の町の様子を描いたともいわれています」

『餓鬼草紙』の提示も含め、学び舎教科書の展開をそのままなぞる。ただし、純粹に苦しむ人々の姿に注目させ、「救い」はそのあとで出したいので、同じ「餓鬼草紙」でも、河本家本の「食糞餓鬼図」の場面を用いている

【問】 こうした時代のなかで、さっきの「念仏札」を配る人物が現れた。

人々は、「念仏札」を喜んだと思いますか? 喜ばなかったと思いますか?

S: 「世の中が苦しいから、死後、安らかな世界に行けるのは魅力的だったはず」

S: 「すがれるものにはなんにでもすがりたいんじゃないかな」

T: 「なるほど、そうかもしれないね。当時、救いを得るには厳しい修行に耐えて悟りを開くか、寺院への莫大な寄付など財力を使うかしなければいけない、と考えられていました。念仏札を受け取れば極楽浄土へ行ける、念仏を唱えれば極楽浄土へ行ける、というのは、魅力的だったかもしれませんね」

T: 「それでは、実際に念仏札を配った、一遍という人の様子を見てみましょう」



【問】念仏札を配った一遍という人物（一番左側）が描かれています。いったい、どんな場面でしょうか？吹き出しにセリフを書き込んでみましょう。

〈少し時間をとり、机間巡視を行ったうえで〉

T: 「では、AとBにどんなセリフが入りましたか？ 紹介してください」

S: 「Aは、刀を指差して『それ、なんぼ？』。Bは、『売りもんちゃうわ！』」

T: 「なるほど、一遍から話しかけたという説だね。他の人はどうかな？」

S: 「Bが先で、『くそ坊主、叩き斬るぞ！』。Aは『南無阿弥陀仏！』」

T: 「さっき学んだ『南無阿弥陀仏』を早速活用しているね」

S: 「Bが、『キュー』とか言っている。Aは、『それ以上動くと命がないぞ!』」

T: 「じゃあ、このあと一遍が男をやっつけるのかな？」

S: 「そう。一遍が最強」

T: 「そもそも、なぜこのような状況になっているのか。実はこれは絵巻物の一場面で、その前の動きも全部書かれています。順番に見てみましょう」

〈 黒板掲示用に、一遍聖絵の展開を作っておき、備前福岡の市にいたるまでの状況を見ていく。神主の息子の嫁が出家する場面では「だから近くの人はい立っているのか」等と反応する生徒もいる。男たちが追いかけてきて、備前福岡の市の場面までたどりつく 〉



一遍を追う神主の息子と従者



神主の息子の嫁の出家

【問】一遍はこのあと、どうなったのでしょうか？

S: 「神主の息子に殺された！」

S: 「男たちをやっつけた！」

T: 「どちらの意見も出ていますね

では、つぎの場面です」

〈 つぎの場面の絵を見せる 〉

男たちが出家した場面である。一遍は、「おまえ、神主の息子か」と言った、と紹介し、「心の中で南無阿弥陀仏と唱えたのかもしれないね」等といってみる。



神主の息子の出家

一遍のカリスマ性や、救いを求める人々がたくさんいた点をおさえたい。こうした人たちも包み込み、一遍の教団は大きくなっていく。



一遍の旅路 (五味文彦『新視点中世史 躍動する中世』182 ページより)



『一遍上人絵伝』 国立国会図書館蔵

〔展開2〕 おどり念仏の秘密

【問】 一遍たちが念仏を唱えている場面です。気が付くことはありますか？

S: 「めっちゃ人が集まっている」

S: 「高いところにいる」

S: 「車がたくさんある」

S: 「見ている人がたくさんいる」

T: 「いいところに気づくね。みんながいうように、とてもにぎわっています」

S: 「念仏を…唱えている？」

S: 「太鼓みたいなのを叩いている」

T: 「念仏というイメージと違うかもしれないね。舞台の上で行っているのが、一遍が取り組んだ「おどり念仏」です。資料を読んでみましょう」

『ともに学ぶ人間の歴史』66 ページより、以下の記述を判読する)

《資料2》 時宗を開いた一遍は、13世紀の後半、九州から東北地方まで、16年間にわたって旅し、出会った人たちに念仏札を配りました。「南無阿弥陀仏と唱えて、阿弥陀仏にひたすらすがりましょう。阿弥陀仏はすべての人を救い、極楽浄土へ導いてくださいます」と、念仏をすすめました。

一遍と弟子たちは、町に入ると、鐘や太鼓を打ち鳴らし、念仏を唱えながらおどります… (後略)。

T: 「鐘や太鼓を打ち鳴らす、おどりながら念仏をとなえる。今の念仏のイメージとは、だいぶ違いますね。ところで、考えてみたいのだけれど…」と言い、
(次の問いを板書する)

【問】 なぜ、一遍は「おどり念仏」という方法をとったのだろう。

S: 「目立って、人を集めやすいから」

T: 「なんだろう？と思わず気になって、人々が集まってきそうだね」

S: 「盛り上がって楽しいほうが、苦しいことを忘れられるからだと思う」

S: 「一緒に参加したいと思えるし、おどっていると元気になれるそう」

S: 「やっぱり、楽しそうだし、念仏札をもらったり南無阿弥陀仏と唱えたりするだけでいいし。きっと一遍は、当時の人たちの気持ちにおどり念仏はあっていると考えたんだと思う」

T: 「なるほど、苦しい時代状況のなかで、『楽しそう』な感じも求められていたの

かもしれないね」

〔まとめ 一遍の宗教活動を問う〕

T:「一遍の教団はどんどん拡大し、各地に道場が開かれていきます。ところが、一遍自身は死に際して、自らが書いた内容を全て燃やしてしまいました」

S:「え、なんで燃やしちゃったの?」

T:「それはわからない。わからないけど、考えてみるに値する出来事です。最後に、この時間のまとめもかねて、次の3つの問いに対して、あなた自身の考えを書いてみましょう」

- ① 一遍は、なぜおどり念仏をはじめたのだろうか?
- ② なぜ人々は一遍の周りに集まったのだろうか?
- ③ なぜ一遍は自らの書物を燃やしてしまったのだろうか?

時代状況を踏まえた一遍への興味や共感から、一遍が自らの教えを記した書物を燃やしてしまった事実、生徒たちは衝撃を受ける。同時に、そこには何かしらの意味があるはずだと考える。③の問いは、明確な答えのない問いである。だからこそ、推論する楽しさがある。授業の終わりには、こうしたオープンエンドの問いを大切にしたいと、筆者は考える。以下は、予想される生徒の記述である。

① 一遍は、なぜおどり念仏をはじめたのだろうか?

- ◆「一体感があって、盛り上がれるから」
- ◆「目立って、人を集めやすい。教団を大きくしていくときに有効だった」
- ◆「自分たちが来ているとアピールしやすい」
- ◆「楽しいと、苦しい状況を忘れられるから、当時の人々の気持ちに合っていた」

② なぜ人々は一遍の周りに集まったのだろうか?

- ◆「楽しそうだから、一緒に参加したくなった」
- ◆「南無阿弥陀仏と唱えるだけで救われる、という主張が魅力的だった」
- ◆「貧しい人でも、唱えるだけで良いというのが良かった」

③ なぜ一遍は自らの書物を燃やしてしまったのだろうか?

- ◆「一遍は『おどり念仏』という、新しいかたちをつくった。その時代に合わせ

て、自分たちで考えて、新しいかたちをつくれ、というメッセージ」

- ◆「自分が書いた言葉に弟子たちが縛られるのを嫌った」
- ◆「勝手に解釈されたり、一部分だけ好きなように使われたりするるのが怖かった」

4 さらに授業を深めるために

授業プランとして、1時間の流れを示した。実をいうと、上記の授業は、筆者が勤務校（私立高校）の日本史Bの授業で実践したのものである。問答形式で記された生徒の反応は、実際の高校1年生の反応である。ではこの授業プランが中学生には難解な授業かといえば、筆者はそうは考えない。『ともに学ぶ人間の歴史』で扱われている教材に子どもたちをひきつける力があるため、校種や「学力」に関係なく、参加できる・深く学べる授業が構成可能なのである。

なお、より深い学びのために、さらに踏み込んだ授業づくりもあり得よう。本時は一遍の行動から時代状況を観るという構成にしたため主題から外しているのだが、市のもつ特異性に注目しても面白い。

例えば、備前福岡の市の場面のあと、神主の息子が出家するが、前掲した、小松茂美編『日本絵巻大成別巻 一遍上人絵伝』の解説文が秀逸である。再掲する。

男が、腰の大太刀に手をかけたとたん、一遍のほうに先に口を開いた。あ、そなたは、吉備津宮の神主どのおご息とな……。あとは、蛇ににらまれた蛙も同然。主従は、ただ、眼を白黒させるばかりであった。

しばらく、沈黙の時間が流れた。やがて、観念した夫は、上人さま、私が、私が悪うござった。妻同様、私も発心いたしました。どうか、私に戒をお授けください。剃髪して入道いたします。という、即座に、かれは折烏帽子を脱ぎ、腰の大小を大地の上に投げ出してしまった。

授業では配布資料の構成を練る必要があるが、文字資料として提示しても味わい深く面白い。神主の息子の「私が悪うござった」は何を指すのか。様々な仮説が立つが、その1つとして、市場との関連性をあげても良いだろう。

前述したように、市場にアジール（聖域）性があるのであれば、そこには「救われたい」という渴望をもった人々が多数集まっている可能性がある。その市場で

布教する一遍の前に現れた、神主の息子と従者の場面の一部を拡大してみる。右側の従者をよく見ると、もともとは一遍と反対側を向いて弓を構えていたのがわかる。



なぜ、弓を構えているのか。中世の市では、市の外の世界の出来事を市（＝無縁の場）に持ち込み、口論や殺傷沙汰を起こすのは、もつてのほかであった。それを承知で神主の息子は市に乗り込んだ。とすれば、従者のもつ刀や弓は、この直後に彼らを排除しにくるであろう市の住民たちに向けられているのかもしれないし、その状況を平和的に治め出家させてしまう一遍のすごみはさらに引き立つ。

だとすれば、次のような発問も授業のなかで位置づけられる可能性がある。

- ・なぜ一遍は市場で布教したのだろうか？どんな人を救いたかったのだろうか？
- ・消された従者の弓矢は、もともとどのような人たちに向けられたのだろうか？なぜそうする必要があったのだろうか？
- ・「私が悪うござった」と神主の息子。どのような悪いことをしたのだろうか？

市のもつアジール性をこの授業の前に配置する等、単元構成の工夫により、この場面から子どもたちがより深く追究し、時代像を形成する活動も可能だと思われる。その場合には、例えば網野善彦・司修『河原にできた中世のまち』も活用すると面白い…。このように、教室の生徒たちの様子や、各教師がワクワクする教材・記述をもとに、授業をアレンジできる自由度が、『ともに学ぶ人間の歴史』に

はある。筆者が冒頭で記した問題関心は、こうした教科書の特性に拠っている。

【参考・引用文献】

- ・小松茂美編『日本絵巻大成 別巻 一遍上人絵伝』中央公論社 1978年
- ・小松茂美編『日本絵巻大成 7 餓鬼草紙 地獄草紙 病草紙 九相詩絵巻』中央公論社 1977年
- ・五味文彦『新視点中世史 躍動する中世』小学館 2008年
- ・網野善彦『無縁・公界・楽—日本中世の自由と平和—(増補)』平凡社 1996年
- ・網野善彦・司修『河原にできた中世の町—へんれきする人びとの集まるどころ』岩波書店 1988年

(私立高校教員)

【編集部注】

ブックレットに載せた『一遍上人絵伝』・『一遍聖絵』は、国立国会図書館にある写本ですが、原本の『一遍聖絵』と同じ場面を掲載しています。

ここでは2018年版『ともに学ぶ人間の歴史』を使用しています。